

40周年記念講演 「ファネロメニ修道院への道」

木戸雅子(共立女子大学 教授・日本ギリシャ協会理事)

本日はこのような貴重な機会を与えていただきまして有難うございます。近年私が手掛けてまいりましたパナイア・ファネロメニ修道院聖堂の壁画の修復が終わりましたので今日はその新しい写真などを見ていただきながらお話をさせていただこうと思います。日希協会には大変ご支援を頂きすでに会報に何度かこの事業に関して書かせて頂いておりますので、今日はこの壁画そのものについてというよりも、何故私がファネロメニ修道院に辿りついたか、というその過程をお話したいと思います。

私がギリシャに留学したのが1972年、日本ギリシャ協会の創立が1972年の12月ということです。留学から帰国後に前田先生や友部先生から御誘いを受けて入会させていただきましたが、日本ギリシャ協会の40周年と私のギリシャ歴は丁度重なります。そんなに経ってしまったのかという感じもいたします。振り返りますと、私の節目節目とどういうわけかギリシャの現代史の転換期が重なるような気がしています。そもそもこの40年は、ギリシャ史の中でも激動の時代と言えるのではないのでしょうか。その歴史を間近に見ながらギリシャを理解したり、感じ取ったりしたことなど、私の今までの仕事の過程と関係づけながらお話しできればよいと思います。とは申しまして、私はギリシャの近現代史の専門家でも政治・経済にも通じてはおりません。自分自身の個人的感想に過ぎ

ないかもしれませんが、自分の肌で感じたことを一度話ししてみたいという思いがありまして、拙い話ではありますが、お付き合いいただければ幸いです。

パナイア・ファネロメニ修道院聖堂の壁画研究 ——サラミナ・プロジェクト

まず最近の研究の対象であるサラミナ島にありますパナイア・ファネロメニ修道院聖堂壁画を見ていただきましょう。サラミナ島はアテネから高速道路でコリントス方面に走り、エレフシナを過ぎたところから左手に見えてくる大きな島です。ペルシャ戦争で有名なサラミスの海戦のあったところです。現代はサラミナと言っています。ネア・ペラマというところからはしけのようなフェリーが出ていて対岸に渡ればそこから車で2～3分のところにあります。今は女子修道院となっていて12～3人の修道女が暮らしています。



パナイア・ファネロメニ修道院 ピスタチオ畑からの眺め

この修道院には、対岸のメガラに 17 世紀末に住んでいたランブロス・カネロスという人が、ある時夢でお告げを受け、それに従ってサラミナ島へ行くと、廃墟に聖母マリアのイコンを見つけ、そこに修道院を建てたという伝承があります。ファネロメニというのはギリシャ語で「顕現の」という意味で「聖母が現れた」修道院ということになり、聖母崇拜と結びついて大変信仰を集めています。ティノス島のパナイア・エヴァンゲリストリア聖堂と並んでその中心となっています。サラミナのファネロメニ修道院には年間 35 万人位の信者が訪れると言われ、祝祭日にはテサロニキなどの遠方からも信者がやってきて、そのバスや車で海岸の駐車場が埋め尽くされるというほど、良く知られた修道院です。

聖堂を埋め尽くす壁画について、その存在は知られていたのですが、長い間煤に覆われ、実際には肉眼でその全貌が見えないので、研究者



パナイア・ファネロメニ修道院聖堂

の注意もあまり引いていませんでした。それを日本の科学研究費の助成金で修復をして、ギリシャと日本の研究者で共同研究をしたのが過去 7 年間のサラミナ・プロジェクトです。3 年間の科学研究費 2 期 6 年に加えて、住友財団の海外の文化財の保存修復基金を横山会長のお力添えもあって 2 年頂けたので完全に修復を完成することができました。日本側のメンバーは私が代表を務め、岡山大学の鐸木道剛教授、東京藝大の保存修復を専門とする木島隆康教授。ギリシャ側はディミトリス・コンスタンディオス元ビザンティン美術館館長とアナスタシア・ラザリドゥ現館長です。コンスタンディオス氏はビザンティン美術館を現代的な美術館に作り変えたカリスマ的な力をもった方で、このプロジェクトは氏なくしては成功しなかったでしょう。残念ながらプロジェクトが始まった翌年に突然亡くなってしまいました。こういうプロジェクトをギリシャで行うことがどうということかについては、後で詳しくお話いたします。

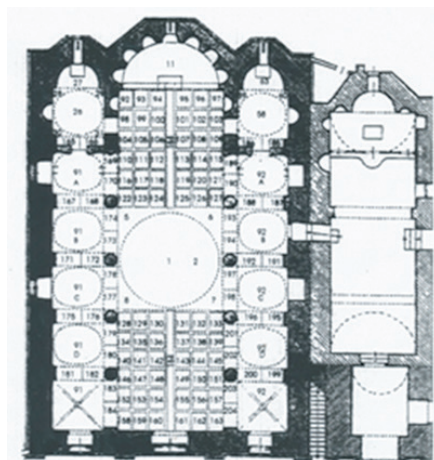
この聖堂はバシリカ式教会堂建築で、中央に大円蓋を配し、南北の側廊には小さなクーポルが 4 つずつある大規模なものです。その壁面全体が壁画で覆われています。入口近くの壁面に銘文がありまして「アルゴスの画家ゲオルギオス・マルクとその弟子たちによって 1735 年に描かれた」ことがわかります。18 世紀のもので、「なんだ新しい時代のものではないか」

とお思いになる方もあるでしょう。ギリシャへの関心の多くが古代に向かっていますが、最近ではビザンティン時代にも少し関心が持たれるようになってはいます。しかし、ビザンティン時代に関心のある方も、欧米の学者たちがそうであるように、1453年にビザンティン帝国が崩壊するとそれ以後に関心を向けるというのはほとんどありません。その後、トルコ支配下のギリシャがどうなったのかは問題にならないのです。日本美術史学会でもポスト・ビザンティン美術はほとんどというか全く研究の対象とされていません。コンスタンティノポリス陥落後の美術はそれ以前の伝統を繰り返し、創造性のない民衆的なレベルのイコン画があるだけであると、一般的には語られてきました。何故そういう時代のこの修道院聖堂が私の研究テーマとなったかというのが、本日のテーマです。

研究プロジェクトの出発点

——ディオニシオスの『エルミニア』

私がこの修道院に初めて行ったのは2003年のことでした。壁面全体は長年の聖堂内で燃やされる蝋燭の煤で覆われていて、その下に多くの壁画があることはわかっていても只々真っ黒でした。銘文のところだけ試験的に洗浄されていたので銘文を持つ天使の画像でこの壁画が大変質の良いものであることはすぐわかりました。この煤の下にどれほどの図像の宝庫が眠っている



修道院聖堂プラン



上：聖堂内部修復以前 下：同修復後

ことか。この聖堂に一步足を踏み入れた瞬間に、天から何かが降りてきたかのように、直観的に「私が探し求めていた聖堂はここだ」と確信しました。

何を探し求めていたのかと申しますと、それは1999年に金沢美術工芸大学のプロジェクトの一環で18世紀に編纂されたギリシャ語で書かれた絵画指南書を翻訳したことに話は遡ります。ディオニシオス・エク・フルナというアトス山の修道僧が書いた『エルミニア』という絵画指南書、あるいは手引き書といったものです。『ディオニシオス・エク・フルナの東方キリスト教会絵画指南書』というのがその翻訳書のタイトルです。この本の始めの6分の1は技法編で、残りの部分はすべて図像編となっています。つまり聖像画の主題、例えば「キリストの降誕図」は誰がどのように描かれるべきかということ言葉を説明してあるものです。この本は1740年頃に編纂されたと見られています。ビザンティン時代、西欧中世の世界でもこのような言葉による図像学の類書はありません。ですからこの本はビザンティン美術史の基本文献ですが、現代に至るまでアイコン画家たちの大切な参考書でもあります。

この基本図書を日本語に翻訳するというアイデアはもともと絵画技法の専門家たちがこの本の技法編の内容に関心をもったところがありました。つまりアイコンの板はどのように準備

するか、そこに漆喰をどのように塗るか、金箔の貼り方、ニス扱い方等々です。この本を翻訳するまで私も欧米の研究を基礎にビザンティン美術の研究をしてきましたので、ポスト・ビザンティン時代には関心を持っていませんでした。この本の図像編の部分も必要に応じて見てはいましたが、最初から最後まで逐語的に読むということはしたことがありませんでした。

翻訳を始めてみて、これはとんでもないことだと実感しました。そこにはあらゆる図像や、聖人の姿の描写すべきことが細かく書かれています。例えば何々聖人はモジャモジャ頭に、長い白髭を持つ、というように。聖人のリストが延々と続くのです。細部を描写しているようでありながら、それを基に実際に絵を描こうとすれば、その説明では不十分です。またビザンティンしか視野に入れていなかった私にとっては見たことのない知らない主題の説明もあります。18世紀の文献なのでギリシャ語も難しく、この書物の使われ方、その存在理由などに考えを巡らせるとわからないことだらけです。これをきっかけにしてそれまで見てこなかったポスト・ビザンティン時代の教会に目を向けるようになりました。

これほど細かく図像の説明があるのだから、私が知らなかっただけでどこかにこのように図像が無数に描かれた教会がきっとあるに違いないと考えて、その教会探しを始めたのが2003

年にオナシス財団の招聘でアテネに8か月間滞在した時でした。それも滞在の最後の最後でこの修道院に出会ったのです。ディオニシオスの本が1740年、この壁画が1735年という時代的にもほとんど同時代のものです。

ギリシャ人との共同研究

これがファネロメニとの出会いでした。私どものように日本にいてヨーロッパの研究をしているものにとって辛いことは、研究対象が身近にないということです。特に美術史は本物を実際に見ないと始まらない学問です。作品のある場所へまずは出かけて行かなければなりません。研究のほとんどはヨーロッパ人の研究書を読むことがその中心となります。文献を読んではまた読むという生活が続きます。若いうちは外国語を読むのに必死でそれだけでも研究しているような気になっていましたが、段々年を重ねてくるとオリジナル研究がしたくなってきました。大げさに言えば文献を読む勉強好きの人生で終わってしまってよいのか、自分自身はこの研究分野に一体どのような貢献ができるのだろうかと考えようになります。生意気にもオリジナル研究がしたい、直接研究対象に触れたい、初めの一步から研究したいという思いが強くなっていきました。

ファネロメニ修道院の壁画こそ私の研究対象だと確信すると同時に頭に浮かんだことは、



第1期修復時 故コンスタンディオス氏（右端）とともに

日本の文科省の科学研究費の助成を受ければ、この煤に覆われ全貌が見えない壁画を日本のお金で修復するのは可能である。それはギリシャにとっては文化財保存修復の上で大きなメリットになる、そしてギリシャ人研究者と共同研究ができれば、私にとっては未刊行のモニュメントのオリジナル研究に着手できることになる、ということでした。その考えを当時のビザンティン美術館館長のコンスタンディオス氏に投げかけてみたところ、「なんで今まで誰もそういうことを言わなかったのだ」と言って、私の考えに賛成し全面的に協力してくださるということになったのです。

ギリシャで現地調査をしようとする考古局から許可をもらわなければなりません。写真撮影などの許可は比較的すぐとれますが、それは研究をする許可ではないので、現地調査を終えていざその成果を出版しようとする、そこ



第1期修復作業

で撮った写真を使うことができないということが起こります。せっかく苦労して調査し、質の良い写真も撮れているにも関わらず出版物に写真をのせることができずに、手書きの書き起こし図しか掲載できなかったということが実際にありました。それはいかにも残念です。それまで先輩の研究者の苦労を見て来ていたので、ギリシャと日本の双方にメリットがあればうまくいくのではないかというアイデアが功を奏したかたちとなりました。

うまく滑り出したように見えたプロジェクトでしたが、本当に残念なことに第1期修復が終了したところで、突然館長が亡くなってしまいました。カリスマ的で大変な実力者でしたから修復許可も少し遅れはしたが降りて作業を開始できたと思っていましたが、実はそうではなかったことが亡くなった後に判明しました。ギリシャ人が修復の許可申請をしても許可が降り

るまでに数年かかるのが普通なのに、どうしてそんなに早く許可が降りたのかと不思議がられていたのですが、その意味がわかりました。コンスタンディオス氏の没後考古局の課長が交替して、以前の書類を調べてみたら、書類に不備があったということで、書類が揃うまで修復作業は中止され、全面的に凍結されてしまいました。三か月位待たされましたが、その間足場はリースですから無為に費用がかさんでいきます。日本からその状態をハラハラしながら待つしかありませんでした。その都度何かしらのトラブルで作業が中断させられることも多く、なかなか大変でした。ただ、修復家たちはアテネのTEIという技術大学にある保存修復科を卒業した人たちで、実に真面目に忍耐強く作業をしてくれて信頼できました。彼らは週末だけアテネに帰りあとは修道院に泊っていました。藝大の木島教授も彼らが非常に良い修復をしていると褒めていらっしゃいました。

こうして1972年から始まった私のギリシャ歴の中で、一つ実を結ぶことができたのが今回の研究プロジェクトなのですが、私の中ではここで何となく団大円を結べたような気がしています。少し前半が長くなってしまいましたが、ここからが、私のギリシャ歴の節目と現代ギリシャ史がどのように重なるかのお話します。

軍事政権下のギリシャへの留学

私が留学した 1972 年頃は、海外で勉強をしようと思えば政府給費留学生になるしか方法はありませんでした。1 ドル 300 円で海外持ち出しは 1000 ドルに制限されていました。美学・美術史を勉強する藝大の芸術学科に在学していて、私もいつか海外で勉強したいと思っていました。給費生になるのは大変難しいこともわかっていましたので、学部時代にいろいろ調べていてギリシャが学部生を募集していることを知り、挑戦してみたのです。その頃ギリシャの大学にはまだ大学院がなかったので、学部生を募集していたのでした。大学院で留学することを目指していましたが、学部生でも受けられるというので、練習のつもりで試験を受けてみたら入ってしまいました。試験にパスしてしまっただけから本当に行くべきかどうかで大変迷いました。結局行くことにしました。これは大変条件の良い留学制度で、往復旅費と 5 年間の生活費が出るということでした。

その当時ギリシャはパパドプロスによる独裁政治（1967 年～ 1974 年）の真只中でした。当時のギリシャは今と随分違って、前近代的な貧しい国でした。そのイメージはフセイン時代のイラクに行くような感じだったかもしれません。今思えば、よく私の両親は許したと思います。軍事政権下の国に行くことがどうということか、私も親も全くわかっていなかったの



テサロニキの風景 ホワイト・タワー

すね。いろいろな経験をしましたが、外国人の女子大生が一人暮らしをするのは、軍事政権下はかえって安全だったからといえます。何か悪事をはたらいてつかまると、その後独裁者によってどうされるかわからないので、夜中に女性が一人で歩いても危険はないと言われていました。

最初の 1 年間はテサロニキ大学でギリシャ語を学び、ギリシャ語の最終試験に合格すれば、その後 4 年間はどの学部でも登録できるというのが奨学金の条件でした。テサロニキに着いたのは 1972 年 10 月 27 日でした。次の日、28 日の朝のことは忘れられません。テサロニキの街の中央に大学の広大なキャンパスがあります。その一角にある ABC ホテルという今でもあるホテルにまず泊まりました。

その日は祭日で、大学は休みなので諸手続きもできないからと、休息日を決め込んでゆっく

り寝ていましたが、突然ものすごい騒音で飛び起きました。すぐベランダに出てみると、目の前を巨大な戦車がゴーゴ音をたてて走っていきます。その後にミサイルを搭載したトラックが続いています。「軍事政権の国に来るって、こういうことだったのか」と心底驚きました。冷戦時代ですからソ連がバルカン半島を掌握して地中海への進出を虎視眈々と狙っているので、北ギリシャのテサロニキにはギリシャで最も強力な第三軍団が配置されていると聞いていました。その位の知識は持っていたのですね。「戦争が始まってしまったのかもしれない」とあわててレセプションに行って聞いてみると、「今日は戦争記念日で、そのパレードがはじまったんだよ」と教えてくれました。戦車などそれまで直に見たこともないので本当に驚きました。段々とパレードが進み始めると、かわいらしい民族衣装を着た子供たちのグループもあり、結局その日はギリシャのパレードを眺めお祭り気分を味わいました。

テサロニキでの生活

テサロニキでは建ったばかりの8階建ての近代的なきれいな寮で暮らしました。藝大の敷地内には昭和前期の隙間風が入ってくるような古い木造家屋の女子寮がありましたが、それと比較しても格段に快適な生活でした。ギリシャが貧しくて遅れた国だなんて誰が言ったの？と



テサロニキ大学女子寮

いうくらい満足しました。食事は3食とも寮でおいしく食べられます。分量も多くこんなものを毎日食べていたら大変だと思いつつ、次第に胃が大きくなって全部食べられるようになってしまいました。日曜日は半身くらいの大きな鶏のローストと、デザートはバクラバでした。皆さんご存知のとおり、とても甘いお菓子で、あまりの甘さに最初は一口だけにしたのですが、おいしいので毎週食べる分量が増えて、一か月後には全部食べられるようになっていました。その結果1か月後には10キロ太っていて、持っていった細身のジーンズはすべてはけなくなりました。

研究テーマの変更

——ギリシャ人にとっての美とは

ギリシャの留学試験は文部省とギリシャ大使館でそれぞれ行われました。試験の一部にギ

リシャでの研究計画を英語かギリシャ語で提出することになっていました。一体ギリシャで何を勉強するのか、まだ研究テーマも決まっていない学部生ですから、ギリシャと言えば古代ギリシャ、アクロポリスのパルテノン神殿のフリーズ彫刻の勉強をするというようなことを書きました。英語で長い論文を書くというだけで当時の私としては大変だったのです。しかしテサロニキに1年間住んだことによって、私の関心は古代ではなくてビザンティンへと向かうことになりました。テサロニキは美しい街です。テサロニキ湾の向かいにはオリンポス山が夕焼けとともにシルエットで浮かびあがります。ここはビザンティン帝国の第二の都市で、アテネよりも長い歴史をもった中世の町です。街にはビザンティン時代の聖堂が点在し、その中はモザイク画で装飾されています。そのモザイクの美しさにもふれていましたが、ビザンティン美術に関心を持つようになったのは別の理由からです。

寮にはギリシャの各地方からきている女学生が住んでいました。寮で唯一の日本人の女子ということでなかなか人気者となりました。週末や長期休暇に先を競って私を自分の村や町に呼んでくれました。そうした機会にはなるべく彼らの風習に従うようにしました。復活祭（パスハ）の時には受難週のニスティア（肉断ち）も一緒に経験し、ギリシャ人の生活にどっぷり

浸かりました。それによって年中行事はすべてキリスト教の祭りでどれほど彼らの精神的世界がギリシャ正教に帰属しているかということがよくわかりました。遺蹟や博物館などあちらこちらに連れて行ってくれるので、もちろん古代の神殿や美しい彫刻なども一緒に見ました。そういう時は「マサコ見てご覧、私たちの先祖は素晴らしいものを作ったでしょう」とばかりにプライドを持って胸を張って語ります。一方で壁画やモザイク画で大きなキリスト像（パントクラトールのキリスト）などが描かれている教会などでは、そのキリスト像を見上げて「マサコ、何て美しいキリストなの」と言います。ヨーロッパの古典的美を美の規範として美術をみることに慣れた私の眼には「これは美しいのかな？」と、彼らの感覚が今一つ理解できなかったのですが、彼らは確かに本心から美しいと言っているということははっきりわかりました。

しかしある時ふと気が付いたのです。イオアニナにある湖に浮かぶ小さな島の修道院の聖堂に入った時のことです。素朴な石積みの聖堂の中に入ると外とは違う空気が漂っています。蝋燭のにおい、暗闇に浮かび上がる壁画の色などが、一瞬奈良のお寺の中に入っていくときの感覚に似たものを思い起させたのです。目から鱗が落ちた瞬間でした。藝大では古美術研究旅行という授業があって3週間毎日奈良京都のお寺を歩き回ります。私は特に奈良が好きだったの



聖ニコラオス・フィラソロビノン修道院聖堂 イオアニナ

ですが、そのお寺詣りとビザンティン聖堂を訪ね歩くことが感覚的にとても近いことに気が付いたのです。私の美の基準はミロのヴィーナスでもボッティチェッリでもレオナルド・ダ・ヴィンチでもなくなってしまいました。ヨーロッパの古典的美は教えられたものであつて私のもとの美的感覚ではなかったことを知りました。ギリシャ人の美意識を知りたい、それが私をビザンティン美術研究に向かわせた理由です。

アテネのポリテクニオン事件

——1973年11月17日

一年間の語学研修を終えてその後はアテネのポリテクニオン（工科大学）にある美術学校

に登録しました。奨学金はそこから4年間であることになっていましたが、私はすでに日本で学籍があるので、休学できるぎりぎりの2年間をアテネで過ごしました。藝大の美術史は物を自分で作りながら考えるというところに特徴がありました。私も自分で作ることで物が見えてくると考えるタイプですので、アテネの美術学校を選び、中でもテサロニキでその美に開眼したモザイクと壁画を勉強しようと思いました。それが1973年の秋のことです。

ギリシャの現代史年表を見ていただくと、1973年11月17日に「ポリテクニオン事件」というのがあります。これは軍事政権崩壊の始まりとなった事件で通称デカ・エフタ・ノエンヴリウ、「11月17日」と呼ばれています。この事件が起きた時は、秋から始まった授業も軌道にのって楽しく通っていた頃でした。ポリテクニオンはアテネ考古学博物館の隣にありました。その日は午後4時から授業があつたので出かけていくと、ポリテクニオンの構内は学生や労働者で埋め尽くされおり、そのフェンスの外側を警官が取り巻いていました。これはパパドプロス政権に対する学生が起こした最初の抗議行動でした。

中に入ることはできないので、しばらく眺めていました。アテネの街路樹にネランジというオレンジに似た実をつける木がよく植えられています。苦くてマーマレードにする実です。ポ



ポリテクニオン事件を報道する新聞写真

リテクニオンの構内にもたくさん植えられていました。学生たちは、その実をもぎっては外の警官たちに投げています。それを見て「なんて平和な学生運動」と思ったものです。安田講堂の攻防を見たばかりの私の目には火炎瓶のかわりにネランジなんてと思ったのです。その日の晩に日本へ「ギリシャのオレンジ戦争」と手紙を書きました。しかし事態はそんな生易しいものではなかったのです。

次の日ラジオをつけても、軍隊の音楽がながれているだけで、外では「パーン、パーン」と盛んに音がしています。アパートの外に出てみると何人かが不安気な様子で話しています。管理人さんに「今日は休んで部屋にいなさい」と言われました。前の晩にポリテクニオンのフェンスを押し倒して戦車が入り無差別射撃をして学生が殺されたのです。当時政府は11人死亡と発表しましたが、実際は60人とも80

人とも言われていて未だに真相は不明です。軍事政権ですから遺体をまとめて埋めてしまったので遺体が戻ってこないなど悲惨な事件でした。街の中に逃げた学生たちを追ってシンタグマ広場からヒルトンホテルあたりまでのヴァシリス・ソフィアス大通りを戦車が行ったり来たりして空砲を打っている音その日一日中鳴っていました。もし前日ポリテクニオンの中に私も入っていたら、今こうして話してはいなかったかもしれません。日本ではありえない経験でした。

軍事政権崩壊——1974年

この事件をきっかけとしてパパドプロス政権は弱体化し、結局次の年に北ギリシャの准将イオアニディスによる無血クーデターで失脚します。同じ年の7月20日にはキプロス紛争が始まりました。その日は朝からアパートの住人が戦争が始まったと騒いでいて、兎に角食べ物を買い込みなさいと勧められました。いつもの当時のミニ・スーパーのようなお店（バカリコ）に行くと、すでに棚はガラガラです。途方に暮れていると、お店のご主人が裏へ廻れと合図をするので行ってみました。裏の倉庫には食べ物が詰まっていました。自分の家族のためのストックだったのでしょう。何でもいから持って行きなさいといひます。戦争体験もなく一体何が必要なのかもわからずボーッとしていると、



メリナ・メルクーリとパルテノン神殿 地下鉄アクロポリス駅構内の写真

お店の奥さんが次々に袋に詰めてポンと渡してくれました。「何か足りなくなったらまたおいで」と威勢よく言ってくれてお金は全く受取りませんでした。(可哀そうに女の子が異国で一人、こんな戦争が始まっちゃってどうするんだろうね) と思ってくれたのでしょうか。

街の機能がすべてストップしてしまい、他にすることもないので、観光客や外国人は為す術もなくシンタグマ広場に集まってきていました。私もボーイさんのいなくなった外に並んだカフェニオンの椅子に座って、一方方向に歩いていく男たちの群れを見ていました。男たちは食糧を少し入れたビニール袋だけをぶら下げて、奥さんなのか恋人なのか女性たちがその周りを一緒に歩いていきます。徴兵されて決められた広場へ向かう人々ですが、印象深かったのは、戦争に行くという彼らの顔が明るかったこ

とです。深刻な顔をしていないのは、「トルコから自国を守るために喜んで戦う」ということなのだろうかと、政府に対抗する激しい学生運動を見慣れていた私には意外な光景でした。キプロス紛争は結局ギリシャ国内には大した影響もありませんでした。間もなく軍事政権は完全に崩壊し民政化しました。

軍事政権崩壊とともに、それまで亡命していたカラマンリス元首相やメリナ・メルクーリがフランスから帰国してきました。その日のことも忘れられません。その日私は郊外に出かけていて電車で帰ってきたのですが、途中で降ろされてしまったのでシンタグマ広場を歩いてパングラティまで歩いて帰ろうとしました。シンタグマに近づくと広場を群集が埋め尽くしていて身動きが出来ないほどです。急に群集からウォーッという大歓声が上がりました。皆が見ている方向を見上げてみると、シンタグマ広場の角にあるアテネの超高級ホテルのグランドブルターニュの最上階のテラスにメリナ・メルクーリが出てきて手を振っているのです。時々群集の歓声に答えるために姿を見せていたのです。

この大歓声は広場から相当離れた私の家まで一晩中間こえていました。この時の下から湧き上がってくるようなウォーッという大歓声は、それまで軍事政権下でどれほど人々が鬱積した思いを募らせていたのか、民政化をどれほど喜んでいたのか、その思いの重さ強さ激しさ

の証だったかもしれません。この激動の時代に留学生としてギリシャに暮らしたので、実は落ち着いて勉強できる状態ではなく、到底十分勉強ができたとは言えません。しかしこの時代だったからこそ言葉ではなかなか表せないギリシャ人の感性を肌で感じることができたのではないかと思います。

私の節目とギリシャの現代史の節目が何故か一致するということはその後もありました。先ほどの「ポリテクニオン事件」の後、その時の指導者たちを殺害するテロリスト集団ができました。反政府組織で11月17日（デカ・エフタ・ノエンヴリウ）とよばれました。1973年以来、ポリテクニオン事件の復讐のための暗殺を繰り返していました。私は2003年にオナシス財団の招聘でアテネに8か月ほど滞在しました。最初にお話ししたとおりその滞在がファネロメニ修道院の研究のきっかけになったのですが、その2003年の2月の末に30年間続いたこの暗殺団の全員が逮捕されました。私がアテネに着いた翌日の3月3日はその裁判が始まった日でした。その日は朝からテレビはもっぱらその裁判を報じていました。留学時代にポリテクニオン事件を直に経験し、30年後に再度長期滞在するためにアテネに着いてみるとそこに暗殺団の終焉があったというわけです。ただの偶然とは言え、私としては何か一つの時代が終わったと感じられ、勝手に感慨にふけっ



パナイア・ファネロメニ修道院聖堂内部

ていました。

ファネロメニ修道院壁画修復の評価

2007年以降の修復事業の間にも、政治的なスキャンダルが起きたことで修復許可が棚上げになったりとギリシャは研究にも政治が密接に関係しているのだということを実感したことなどもう少しお話ししたいところですが、時間切れとなりましたので最後に修復後のパナイア・ファネロメニ修道院聖堂の甍った壁画をもう少し見ていただいて、今日の講演を締めくくらせて頂きたいと思います。

この壁画の見どころは、地上11メートル以上ある穹窿天井にこれほど細かい線で、手を抜

くことなく細部までまるで携帯用アイコンのごとく綿密に描いていることです。下から見上げる人には決して見えないところも、ここまで徹底的に描いていて手抜きをしていません。キリストによる「悪魔憑きの治癒」という主題の画面では小さな悪魔がたくさん描かれています、その小さな目もいろいろに描き分け表情を出しています。このような描き方は壁画というよりも板絵の携帯用アイコンを描く方法といえるでしょう。すなわちこの聖堂全体が3500以上のアイコンで埋め尽くされていると表現することも可能です。

問題は、どうして1735年というトルコ支配下にこれほどの質と数を持つ壁画を描くことができたということです。本当にこの時代、ポスト・ビザンティン時代の絵画はビザンティン時代の美術よりも劣っているのでしょうか。それどころかビザンティン時代には全くない興味深い主題やモチーフがあり、この聖堂はその図像の宝庫と言えます。文章による図像の宝庫であるディオニシオスの『エルミニア』と同じ時代の、実際の作品を我々はこれほど鮮明な姿で見ることができるようになったのです。是非これは現場でご自分の目で見ていただきたいと思います。アテネから車で一時間ほどで行けるところです。もしいらっしゃいましたら修道女の誰でもよいですから、「キリア・マサコ」あるいは「キリア・キド」とおっしゃってください。



バルトロメオ総主教と執務室にて

修道院製のおいしいクッキーやコーヒーがでできます。宿泊施設もあります。去年は学生38名、総勢41名で泊めてもらい、学生たちは壁画にも修道院にも感激していました。

日本ギリシャ協会の横山会長も助祭室の修復中に来てくださいました。足場に登ってとても熱心に予定時間を上回ってみてくださったので、その時来ていた考古局の人たちが大変喜んでいました。この修復に関しまして、ギリシャでは大変高く評価されています。おかげ様で私も知られるようになっていきます。日本ではなかなかこの成果を取り上げていただけないのですが、この修復のことがイスタンブールのバルトロメオ総主教のお耳に入り、2012年にお招きいただきイスタンブールのファリロの総主教の執務室でのお目どおりが叶いました。1時間半ほどゆっくりお話をさせていただくという貴重な機会を与えていただきました。

昨年には修復終了のお披露目の式を現地とアテネのビザンティン美術館で行いました。その時着任直後の西林万寿夫大使ご夫妻も出席してくださいました。ギリシャの外務省、文化省どちらもこの事業を高く評価してくださり大臣たちが公式面会をして下さいました。外務省がサラミナ議会に私を名誉市民とすることを提案してくださったそうで、市議会で議決され修復終了の報告会の最後に市長からサラミナ市の名誉市民の称号を授与されました。

いろいろ申しましたが、これが何故私がパナイア・ファネロメニ修道院聖堂の壁画研究をするに至ったか、何故欧米や日本の研究者が関心を向けないポスト・ビザンティン時代の美術に関心を持つようになったのか、それは一重にギリシャ人と実際に触れ合いその文化に浸ったからに他ならないでしょう。名誉市民の称号はファネロメニのプロジェクトに対してだけでなく、長年のギリシャ語教育やギリシャとの文化交流の活動などを総合してのことだそうですが、「名誉」はともかくとして、40年以上ギリシャとともに生きてきて、古代以来のポリスへの帰属意識の強いギリシャで「市民」として受け入れてもらったのだと考えれば、これは大変嬉しいことです。このようにまとまりのない話を長時間ご清聴いただきまして、ありがとうございました。(2014年6月20日 日本ギリシャ協会第41回総会後の講演会録)



パナイア・ファネロメニ修道院聖堂祭室〈聖母子像〉